

『法華経』は「万人のための価値」を説く

ロケツシユ・チャンドラ

※本稿は、2014年2～5月、マレーシアで開催された「法華経——平和と共生のメッセージ」展の開幕式（2月16日）での記念講演です。同展の開催は日本を含めて11カ国・地域目であり、イスラーム文化圏では初の開催となりました（会場：クアラルンプールのマレーシア総合文化センター。主催：東洋哲学研究所、マレーシア創価学会）。

「一乗」の法とナーランダ大学

『法華経』は、一乗（Ekayana）を説く最高の聖典であ

ります。『法華経』は、一切衆生が菩提を得ることができ、つまり成仏できると説いた仏の究極の教えであります。

それ以前の三乗（声聞乗・縁覚乗・菩薩乗）という河は、一乗の大海（二乗海）へと流れ入るのです。この概念は、『法華経』において「三車火宅の譬え」として描かれています。子どもたちが燃え盛る邸宅に閉じ込められ、父である長者は、子どもたちが欲しがっていた様々な車（羊車・鹿車・牛車／三乗の譬え）を与える約束をして

救い出しました。子どもたちが助かると、長者は彼らにもっと壮大な車〔大白牛車／一乗の譬え〕を与えました。『法華経』の第二章・方便品では「如来は但だ一仏乗を以ての故に、衆生の為めに法を説きたまう……一切十方の諸仏の法も亦た是の如し」と説かれています。この教えは「価値の普遍性」すなわち、すべての人々のための価値を宣言したものです。

著名な中国の巡礼者である哲学者・玄奘（602－664年）は、「グプタ朝の」シヤクラーディティヤ（Sakaditya）王（クマーラグプタI世／在位414－455年頃）が、ナーランダ大学を一乗への信仰によって設立したと言っています。『法華経』の経題にある「蓮華」の語は、ナーランダの地に一面に咲き誇る蓮に当てはまります。義浄（635－713年）は、玄奘のこの記述を追認するとともに、ガンダーラ地方を越えたウツタラパタ（Uttarapata／北インド）の地の僧ラージャヴァンシヤ（Rajavansha）が、釈尊の二大弟子のひとり舍利弗の生誕地・ナーランダに僧院を建設することをクマーラグプタ一世に要請したと付け加えています。

このラージャヴァンシヤの要請には、歴史的に見ても根拠があります。ガンダーラならびにガンダーラより北の地方の僧院や仏塔は、「遊牧民族の」エフタル族（Hephthalites）によって破壊されました。そのため、仏教修学の拠点の建設が緊急に必要となったのです。グプタ朝の王たちは、絶え間なくエフタル族と交戦していました。その地域の僧たちは、グプタ朝の王たちの忠実な協力者であり、王国がより繁栄するのに必要な平和にとって不可欠の人々だったのです。ナーランダ大学は、『法華経』（一乗）を具象化したものなのです。

『サンスクリットの』ナーリーカ（Nalika）は蓮華を意味し、ナーラ（Nara）は蓮の茎を意味します。蓮は、宇宙であります。天空における蓮は、太陽もしくは梵天であります。太陽のごとく黄金に輝く人間は、蓮のような心をもっています。『サンユッタ・ニカーヤ』において、蓮は清浄の表象として用いられています。『法華経』は、その経題そのもので蓮華を賛嘆している、他に並びなき經典です。日蓮大聖人（Nichiren Daishonin）がこの経の題目への礼拝を選択されたことは、大聖人の



「法華経——平和と共生のメッセージ」展（マレーシア展）を觀賞するロケッシュ・チャンドラ博士（中央）。画面右上は「アショカ大王のブッダガヤへ訪問」を描いたインド・サーンチーの大塔西門のレリーフ（レプリカ）

無限の「蓮華智」によるものです。

『法華経』は、将来のナールランダ大学⁽⁵⁾の創立精神となるべき唯一の特権を担っているのです。この大学は多くの国々を仏教の光で照らすことになるでしょう。これまで『法華経』はナールランダで、おびただしい仏教の体系を生み出す力となってきたのです。

内なる光を輝かせる経典

そして日蓮大聖人は、この経典を引き金にして、新たな精神的エネルギーを解放させました。そして今なお、「法の甘露」を味わえるように私たちの心呼び醒まし続けておられるのです。「法の甘露」を味わうことによつて、私たちは、静穏でありながら、しかも温かみのある生命境涯^レに達することができますし、確固たる根柢をもつて周囲の人々や自然環境への慈愛の献身ができます。そうした献身が世界の平和を確かなものにするのです。

『法華経』は、精神的空虚を埋めようとして、人生の方向性と意義を見出そうとする近代精神の探求そのもの

「に應えるもの」であります。経済成長への偏執は、とどめようもないものになっていますが、その熱狂が通り過ぎた後には、何かが失われているのです。私たちが、光を求めて前進する時、池田大作博士の言葉が、心に浮かびます。

「心の 暗雲をはらわんと

嵐に動かぬ大樹を求めて

われ 地より湧き出でんとするか⁽⁶⁾

池田博士は、一切衆生の内奥深くに存在する智慧について、ヘッセの言葉を用いて、より具体的に表現しています。⁽⁷⁾

「君が求めている光は

君自身の中に宿っているのだ」

『法華経』は、私たちのこの「内なる光」を教える哲学の真髄であります。

池田博士は、戸田城聖氏が一九四四年に牢獄で『法華経』を繰り返し読み返した体験を振り返っています。難解な一節に思索を巡らせながら、戸田氏は「仏とは生命である」と覚知したのです。戸田氏は、全生命をか

けて『法華経』を身読されたのです。戸田氏は、仏とは生命そのものであり、仏教は最も深遠な精神的実在を体現しており、一切衆生にとって限らない意味をもっていると悟られたのです。

生きるエネルギーを「開く」経典

全ての人間は、生命を与えられています。生命は、物質とエネルギーを常に外界から取り入れては代謝している《開かれた》存在です。日蓮大聖人は、妙法の「妙」には三義、つまり①開く義②具足・円満の義③蘇生の義の三つの意義があると述べておられます。⁽⁸⁾『法華経』は、完全に《開かれた》経典なのです。戸田氏は、池田博士に、困難に直面した時にこそ、気高い精神へと自己を高めていけると語られました。日蓮大聖人は、佐渡流罪という生涯で最も厳しき状況にあって、『法華経』が内奥の生命の境涯を転換すること、そして「心」と「仏」と「凡夫」との間には違い（差別）がないことを体得されています。ここに、生きるための力強いエネルギーを生み出す確かな方法があるのです。

宇宙は生命と一体であり、生命は宇宙と一体であります。生命が蘇生するとき、その生命力は、精神性を周囲に大きく放射させるとともに、社会の物質面の在り方には抑制をもたらすことでしょう。戸田氏は、非物質的な理法への畏敬の念を抱きながら、「生命の世紀」への扉を開きました。氏は、創価学会の実践者として、両眼に挑戦と不惜身命の光を燃やしつつ、題目を唱えていったのです。

清浄な心をもった創価学会の女性は、(釈尊当時の)女性の出家修行者の僧団出現を継ぐものです。『法華経』では頻繁に「善男子・善女人」と呼びかけています。それは、女性にとつての平等性を示しています。『法華経』は全民衆に開かれた經典であり、全民衆の眞の幸福と平和のために説かれた經典なのです。『法華経』を創造的に漢訳した鳩摩羅什は、『法華経』は「大いに衆生を益し、平和と幸福を衆生にもたらす」(「饒益する所多く、衆生を安樂ならしめたまう」)⁽⁹⁾と述べています。創価学会の会員は、世俗社会で生活を送るあらゆる階層の人々の集まりですが、それでいて全責任を担う人々な

のです。日蓮大聖人は「法華を識る者は世法を得可き⁽¹⁰⁾」と述べておられます。

日蓮大聖人は「色心の二法を妙法と開悟するを歡喜踊躍⁽¹¹⁾と説くなり」と言われています。舍利弗は、「三乗」の法は方便であり「一仏乘」こそが仏の本意であるとわかったとき、その歡喜が体にあふれて踊り出したのです。

火宅にいる子どもたちを誘いだすために牛車などが用意されました。火宅とは世が苦惱に満ちていることを譬えたものであり、大白牛車は素晴らしき「妙法」(タルマ)を譬えています。『法華経』の智慧は、私たちを無比の幸福へと導くのです。この壮大な車は、さまざまな価値の世界をゆつくりと巡り歩きながら、その最も危険な山頂をも乗り越えて先へ進みます。日蓮大聖人は、鳩摩羅什が漢訳するに際して、大白牛車についてのサンスクリット語の『法華経』の記述を簡略化したこと、梵本では車の壮麗さが詳しく描かれ、車の中には六万九千三百八十余りの仏・菩薩が蓮華座の上に坐して乗っておられることに言及しておられます。⁽¹²⁾『法華経』

の)漢訳は六万九千三百八十の文字から成っています。そして、『法華経』の一字一字が仏であられるのです。

この火宅の譬喩を使って、釈尊は、惑いの衆生を目覚めさせ、燃え盛る輪廻の苦しみを自覚させるとともに、『法華経』の壮麗な描写によって彼らの人生を明るく元気づけようとされたのです。世親(400頃-450年頃)は、この譬喩は三界の火宅の中に幸福を求める愚かさについて説いていると述べています。⁽¹³⁾

「信」によって「智慧」を開く経典

池田博士は「仏の巧みな譬えを聞いて、『ああ、よく分かった』というだけでは、まだ十分な理解ではない。本当に深い会得は、全人格的な変革をうながすのです」⁽¹⁴⁾と指摘しておられます。また池田博士は「今の社会の狂いは、全人格的な『智慧』と『知識』とを混同」することから起こっていると述べておられます。⁽¹⁵⁾

日蓮大聖人は、「妙」には「開く」義があると言われました。生命は、どこまでも自己の可能性を開き続け

て無限に向上しようとしています。「その可能性を開き、智慧を解を開くカギが「信」であり」鳩摩羅什は、『法華経』の第四章を「信解品」と名づけました。このタイトルには、限りなき生命の向上を求める心が込められているのです。

『法華経』の教えは「無上宝聚」であります。万人が生命の宝をもっているものであり、私たちは、そのことを認識しなければなりません。一九九五年に起こった阪神・淡路大震災の後、ある方が言いました。「いちばん大切なのは、全部、お金では買えないことが分かった。それは命と空気の思いやりだ」⁽¹⁶⁾と。

池田博士は「信念は、われわれの生の基盤を、つまり、その上で人間の生が展開される大地を作りあげている」⁽¹⁷⁾とのスペインの哲學家オルテガの言葉に言及されています。信念こそが生命を運んでいる「乗物」なのです。私たちは、それまでの信念が崩れ去ってはじめて、やっと、そのことに目覚め、自分が絶望的な状態に陥ってしまったことに気づくのです。

全体論的な観点から見れば、信念と理性は一体でな



「法華経は現代人にとって深く豊かな意義をもっています」——講演する博士
(クアラルンプールのマレーシア総合文化センターで)

ければなりません。『法華経』は、根源的な無知である元品がんぽんの無明を退治するための「信」（信仰・信念）を強調しています。「信」は開きます。「疑」は閉じます。日蓮大聖人の御言葉で言えば「此の信の字元品がんぽんの無明を切る利剣なり」⁽¹⁸⁾であります。信仰は、偏頗へんぱなき全体性を社会に回復させるとともに、個人が真の人生いんだきの頂に到達できるよう助けてくれるのです。

多彩なる「人華」を開花させる経典

『法華経』には「密雲は弥あまねく布しき、遍あまねく三千大千世界を覆い」⁽¹⁹⁾とあります。密雲は仏を表し、仏の教えは「法雨」として示されています。『法華経』の教えは一切衆生を平等に益します。そこには、階級その他による差別はまったくありません。『法華経』は、一切衆生を例外なく平等視します。そこには、愛憎や貪欲、執着の心はまったくありません。『法華経』は、多様性を認め、一人一人を宝として大切にします。池田博士は「創価学会は、具体的な『一人』から離れず、その『二人』を絶対に幸福にするために戦ってきた。これは人類史

に燦然と残る崇高な歴史です」と明言されています⁽²⁰⁾。

雲と雷声は仏の慈悲の声を譬え、降る雨は「仏が」一切衆生を慈しみ護ることを譬えています。すべての人々の生命を、その無限の多様性のまま、「平等に」潤していくのです。そして創価学会は「法の雨」であり、「人華⁽²¹⁾」が満開となる世紀へと、人類を先導しているのです。きょう、ここに集われたマレーシア創価学会の実践者の皆様は、多彩なる人華を潤して、実りをもたらす香り高さ雨であります。

日蓮大聖人は、一人一人が自己の生命の無限の可能性を開拓できるように、「妙法」への覚知の種を植え付けてくださいました。私たちが創価の世界に入る時、人生の嵐や猛吹雪、容赦ない強風をも、人生の春風や青空、陽光と同じように楽しんでいけるのです。

「無上道の人生」を歩ませる経典

マレーシア創価学会は、『法華経』五百弟子受記品の「衣裏珠の譬え⁽²²⁾」でいう「衣の中にあつた宝珠」であり、宿命を使命に転換する力をもっておられます。人生は

つかの間の「露」ですが、『法華経』の大海に連なり、妙法の偉大なる大地に連なることよって、永遠の生命に連なっているのです⁽²³⁾。マレーシア創価学会の皆様は、他者を助けることを喜びとしながら、妙法への理解を深め続けていってください。その「利他」と「求道」の歩みこそが、人生の無上道なのです。

『法華経』法師品で、釈尊は「如来滅後にこの経を修行し弘める者の心得について」、「如来の」衣、「如来の」座、「如来の」室という三つの法軌（衣座室の三軌）を説いておられます。すなわち「如来の衣とは、柔和忍辱の心是れなり」「如来の座とは、一切法空是れなり」「如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是れなり」と。如来の部屋とは、一切衆生を平等に包みこむ大慈悲の生命空間です。如来の衣——忍辱、忍耐は、大いなる力を生み出します。そして如来が坐る「一切法空」の座とは、「利己的な欲望に執着しない」無私の行動を表しています⁽²⁵⁾。

日蓮大聖人の教えによれば、この世界は寂光土とならねばならないのです。

最新の『グラフSGI』に池田博士のメッセージが

掲載されています。

「苦難の夜を越えれば、
晴れわたる朝が来る。

試練の風雪を

耐え抜いてこそ、

栄光の太陽は輝きわたる。」⁽²⁶⁾

池田博士による『法華経』の解説は比類なきものであり、私はそれを字義の上からも、精神の面でも、学んでいます。その解説は、私たちの内に眠る「輝ける生命」に目覚めさせてくれるものです。

マレーシア創価学会の素晴らしい皆様は、無限の慈愛を世界に広げようとされており、その堅忍不拔の御努力は、最高の評価に値します。

生命の力みなぎる未来の日々には、私たち人類の根源にあるものが大歓喜の姿となって現出し、躍動しゆくことでしょう。人類が何千年もの間、抱き続けてきた夢——その夢の中から生まれ、今、聞こえてくる歌声。それが創価学会なのです。

訳注

(1) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、2002（以下、『法華経』と表記）、121-2頁

(2) 玄奘『大唐西域記』巻9。「佛涅槃後未久。此國先王鑠迦羅阿逸多唐言帝日敬重一乘遵崇三寶。式占福地建此伽藍」（大正大藏経51巻923頁中）。「仏の涅槃の後、まだ余り時がたたないころに、この国の先王の鑠迦羅阿逸多^{クライディテヤ}（原注 唐に帝日と言う）は一乘（成仏する唯一の教え。仏教）を篤く信じ三宝を尊重し、りっぱな土地を選んでこの伽藍を建てた」（中国古典文学大系22『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、296頁）
義浄『大唐西域求法高僧傳』巻上の慧輪法師の項。「古王室利鑠羯羅跋底。爲北天竺芻芻羅社鑠所造」（大正大藏経51巻5頁中）。「いにしへの王・室利鑠羯羅跋底（シリシヤクラテティヤ）が北天竺の苾芻（比丘シユ／僧）である曷羅社鑠「社」（ラージャバンシヤ）のために造る所である」

(4) 5世紀中頃に現在のアフガニスタンで勃興し、約1世紀の間、中央アジアや西北インドに勢力を広げ、東西交易の要路を支配した。グプタ朝インドへの侵入は、同王朝の衰亡を早めた。その起源、言語系統などの詳細は不明。558年、突厥とササン朝ペルシヤに挟撃され、567年頃、滅亡した。

(5) 多くの国が協力し、古代のナラランダ僧院跡の近く（インド・ビハール州）に、新生ナラランダ大学が開設さ

れた。初めは歴史、エコロジー、仏教・哲学・比較宗

教、言語・文学、国際関係学・平和学、情報科学技術、経

営学・公共政策などの大学院大学として出発し、将来

的には学部レベルまで拡張する計画とされる。総長は

ノーベル経済学賞を受けたアマルティア・セン博士。

(6) 小説『人間革命』第2巻「地湧」の章から。戸田城聖

創価学会第2代会長との出会いのシーンで山本伸一青

年が詠む即興詩の一節。

(7) 聖教新聞社刊『法華経の智慧』（以下、『法華経の智慧

』と表記）序論「『哲学不在の時代』を超えて」から。

普及版・上巻28頁。ヘッセの詩「書物」の引用は三浦

鞆郎訳・編『生きる』について・ヘッセの言葉』現

代教養文庫から。

(8) 『日蓮大聖人御書全集』（以下、『御書』と表記）所収『法

華経題目抄』に「妙の三義」について次のようにある。

「妙と申す事は開と云う事なり」（『御書』943頁）

「妙とは具の義なり具とは円満の義なり」（同944

頁）、「妙とは蘇生の義なり蘇生と申すはよみがへる義

なり」（同947頁）

(9) 『法華経』123頁

(10) 『御書』254頁

(11) 『御書』722頁。譬喩品の冒頭で「爾の時、舍利弗

は踊躍歡喜し、即ち起ちて合掌し、尊顔を瞻仰して、

仏に白して言さく、『今、世尊従り此の法音を聞き、

心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり…』（『法華

経』148頁）とある部分の御義口伝である。

(12) 『法華経の大白牛車と申すは（中略）羅什・存略の故

に委しくは説き給はず、天竺の梵品には車の莊り物・

其の外・聞信戒定進捨慚の七宝まで委しく説き給ひて

候を日蓮あらあら披見に及び候（中略）車の内には六

万九千三百八十余体の仏・菩薩・宝蓮華に坐し給へ

り』（『御書』1584頁）

(13) 世親の『法華論』（妙法蓮華経憂波提舍）。菩提流支・

曇林等による漢訳を書き下すと次のようにある。「顛

倒して諸の功德を求むる増上慢心なり。謂く、世間の中

において諸の煩惱染の熾燃に増上して、而も天人の勝

妙なる境界の有漏の果報を求む。此れを対治するが故

に為に火宅の譬喩を説く」（大正大藏経第26巻8頁中）

(14) 『法華経の智慧』譬喩品。普及版・上巻257頁

(15) 『法華経の智慧』信解品。普及版・上巻270頁

(16) 『法華経の智慧』信解品。普及版・上巻275頁

(17) 『法華経の智慧』信解品。普及版・上巻286頁。オ

ルテガの言葉は「觀念と信念」桑名一博訳、白水社「オ

ルテガ著作集8」所収。

(18) 『御書』725頁

(19) 薬草喩品。『法華経』241頁

(20) 『法華経の智慧』薬草喩品。普及版・上巻315頁

(21) 「人華」について薬草喩品にこうある。「仏の説きたま

う所の法は 譬えば大雲の 一味の雨を以て 人華を

潤して 各おの実を成ずることを得しむるが如し」

〔法華經〕254-5頁

(22) ある男が親友の家を訪問したが、もてなされた酒に酔

つて寝てしまう。親友は出かける用事があるため、眠ったままの男の衣服の裏に無上の価値がある宝珠を縫い込んで外出する。酔いから覚めた友人は、その宝に気づかず、貧窮したまま諸国を放浪し、やがて親友と再会。親友は男の貧しい姿に驚き、宝珠のことを教える。衣裏珠とは一切衆生の仏性を譬え、貧窮する男とは仏性を自覚できない凡夫を譬えている。

(23) 『御書』156-1頁の「とにかくに死は一定なり(中略)

をなじくは・かりにも法華經のゆへに命をすてよ、つゆを大海にあつらへ・ちりを大地にうづむとをもへ」の一節を踏まえた言葉。

(24) 「若し善男子・善女人有つて、如来の滅後に四衆の為

めに是の法華經を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子・善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し応に四衆の爲めに、広く斯の經を説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは、柔和忍辱の心是れなり。如来の座とは、一切法空是れなり」〔法華經〕366-7頁

(25) 弘教の三軌について「御義口伝」にはこうある。「衣

とは柔和忍辱の衣・当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くなり」〔御書〕73

7頁

(26) 聖教新聞社『SGIグラフ』2014年1月号。「わが友へ」。

※邦訳に際して補った部分は「」で示した。

(Lokesh Chandra / インド文化国際アカデミー理事長)